



昼の部『東大寺の隠れ古社寺を訪ねる』

(19名参加)

神社の名前	ご祭神・ご利益など
巖島(いつくしま)神社	鏡池の弁天さん芸事上達
五百立(いほだて)神社	大仏建立労務災害殉難者
子安(こやす)神社	良弁の母、安産子孫繁栄
辛国(からくに)神社	天狗の妨害封じ
興成(こうじょう)神社	若狭井の鶴、豊玉媛命
飯道(いみち)神社	カグヅチ、家内安全
遠敷(おにゅう)神社	遠敷明神、山幸彦

東大寺の境内にある多くの神社の内、今回は7社を訪ねた。いずれも小さな神社でお参りする人も少なかったが、どの神社も美しく、清々しい雰囲気であった。それぞれの神社毎に由緒があり、ご祭神やご利益を教わり、参加者各自、家内安全や子孫繁栄など祈念しお参りした。

夜の部『奈良豆比古神社の翁舞』

(26名参加)

資料館にて奈良阪町の村田昌三氏の話聞いた。館内には奈良阪町の古地図、翁舞のお面、大和名所図会、おびたしい数の古文書の類、元明元正天皇の陵墓の地図と口上書などが展示されていて、それぞれ説明してもらった。特に大和名所図会に描かれた江戸時代の奈良豆比古神社が印象に残った。当時は善城寺という寺で本殿も、鳥居も描かれ、仏像もあったそうだ。また万葉集に歌われている「平城山の児乃手柏」も、元明天皇の陵墓から転がり落ちた函石も描かれている。歴史ある町を守る御苦労を思った。

すっかり日が暮れ拝殿の傍に各自陣取り、翁舞の始まりを待った。20年毎に行われる造替の62回目が今年行われ、ちょうど1週間前に御遷宮なったばかりで、本殿は黒と朱の艶々した色のコントラストが美しい。また拝殿の軒の板も真新しく、樋の赤胴色もきれい。釣り灯笼、祭り提灯に火が灯り、やがて篝火が焚かれた。

奈良豆比古神社の翁舞は国の重要無形民俗文化財に指定され、昔浄人王が父春日王の病氣平癒を祈って舞った猿楽が始まりで、能の源流とされて

いる。翁講・翁舞保存会により毎年奉納される。まず演者、囃子方は1人ずつ本殿に向かい御辞儀し拝殿に座った。千歳は男の子が演じた。何やら謡いながらゆったりと舞う。伴奏は笛と鼓、単調なリズムとメロディー、「よおう、ほお、はっ」というお囃子。千歳は露払いの役で次に登場する翁のために拝殿内を歩き回り清める。次に翁は美しい衣装にお面を付け明るい声で「天下泰平、国土安穩」と唱えながら舞う。この翁は平城津彦神かなと思った。続いて2人の翁が加わって3人の舞が始まり、「万歳楽」の連呼、声が揃っていっそう華やか。施基親王と春日王か、3柱の神が揃い有難味が高まる。翁退場のあとは三番叟、これは質素な衣装で荷物を持ち、田畑の仕事の表現、コミカルな動作もあり農耕民だと思った。ここに先ほどの千歳が登場し三番叟と問答をした。「…候」しか聞き取れず内容がわからなかったが、2人は決して対面することはない。農耕民と神の使いの



千歳とは対面することはできないのだろう。三番叟はここで神からの鈴を千歳から受け取る。顔には黒いお面を付けて、その鈴を振り鳴らしながら大喜びで激しく舞う。床を踏み鳴らし、ジャンプし、五穀豊穡を祝い神事は絶好調になり、終わった。

なんと素朴で心のこもった、古代人の願いが伝わってくる神事なのだろう。場内は不思議な感動に包まれた。神の存在を信じない人も多い現代人も、人間の力ではどうしようもない大自然の存在を感じる。自然の恵みに感謝し、また自然の猛威を恐れるのは古代人と同じ。そんなことを思いながら帰途についた。貴重な体験をありがとうございました。(参考文献：武藤康弘著「映像でみる奈良まつり」)(文責 守口)